

「環境・景観・造園」分野

テーマ：自然体験型レクリエーション空間の利用計画と運営
—空間の利用を支える新しい技術と人—

趣旨：これからの安定成熟社会、人口減少社会においては、都心回帰や市街地のコンパクト化等に伴い、都市の郊外では開発計画が白紙撤回されたり、遊休地の増大などにより、相対的に生産緑地や自然的土地利用の割合が増えていくことが予想されている。それに伴い、そうした緑の保全活用や適切な管理が求められると同時に、都市住民の自然とのふれ合い指向の高まりを受けた新たなまちづくり、地域づくりが求められるようになってきた。

また、自然とのふれ合いの方法においても、ユーザーの意識やレベルの向上に伴い、より親密な自然とのコンタクト、自然体験・風景体験の質の向上が求められるようになってきた。そうした中で、市民により豊かな自然体験、レクリエーションの機会と場所を提供するノウハウがハード、ソフト両面において求められるようになってきた。

特に近年は、里山でのウォーキングや風景ウォッチングなど、身近な自然をじっくり観察し、それに親しもうという利用が活発化している。また奥山の自然においても、従来の登山のように単に登頂だけを目指すのではなく、ガイドを伴ってより深い自然への理解や適切な利用を促そうという動きもみられる。

こうした利用を活発化させ自然への理解者を増やしていくことは、将来の自然資源の適切かつ持続的な利用と管理・運営のシステムを築く上で大きな意義を有している。

一方、こうした利用の拡大を推進する行政担当者や各種団体（NPO法人など）にとっては、ガイドマップの作成、利用方法の検討、人材（ガイド）の育成など、技術面・運営面での様々な課題を抱えている。

このような背景を受けて本研究会では、かつて無い高まりをみせている自然体験・風景体験のニーズに応じて、実際に様々なシステム開発が行われた事例（乗鞍五色ヶ原、多摩丘陵フットパスなど）を紹介しながら、具体の技術的な課題と今後の方向性について議論したい。

話題提供者：

①松本 清（フリー環境コンサルタント、NPO法人みどりのゆび理事）

「多摩丘陵フットパス」および「乗鞍五色ヶ原」計画の事例から

②栗田和弥（東京農業大学地域環境科学部造園科学科）

市民の参加とマネジメント

コーディネーター：麻生 恵（東京農業大学地域環境科学部造園科学科）